

対馬丸記念館で考えた平和

浦添市立港川小学校五年 與座 悠真

ぼくは、対馬丸記念館へ行く前から、こわい気持ちがありました。「もし自分が戦争の時代にいたらこわいな、おそろしいな。」

テレビで今も戦争をしている国のニュースを見ると、大人たちはどうして戦争をしたい気持ちになるのかなと思います。昔は、戦争のせいで当たり前のことができませんでした。今のぼくたちは、学校へ行き、友だちと遊び、ごはんを食べ、あたたかいふとんでねむることができます。そんな当たり前の毎日がある今は、とても幸せです。なのに、どうして人間は同じあやまちをくり返してしまうの？

戦争体験者の方が今の世界を見て、「まるで戦前のようにだ」と話しているのを聞きました。ぼくはその言葉を聞いてとてもこわくなりました。そして、対馬丸に乗っていた子どもたちは、きっとぼくよりも、もっともっと大きなきょうふの中にいたと思います。

実さいに記念館に行ってみると、再開する前、親たちはとてもなやんでいたことがわかりました。

「海には、てきのせん水かんもいるかもしれない。でも沖縄に残ったら、アメリカ軍がやってくる。」

どっちを選んでも戦争にまきこまれます。ぼくのお母さんは、「そ開させるのも、島に残るのもどっちもいやだな。心が苦しくて、考えられないね。」

と言いました。ぼくも同じ気持ちでした。子どもたちの中には、「内地に行って、電車や雪が見れるかも。」

と、再開を少し楽しみにしていた子もいたそうです。ぼくは、「先生や友だちがいつしよなら少し安心かな。でも家ぞくとはなれるのはさびしいな。」

と言いました。お母さんが、

「海の中にしずんでしまった子たちは、どんなことを考えていたのかな。」と聞きました。ぼくは、

「まだ死にたくない。もっといろんなことがしたかった。こわいよ助けて。」と答えました。

ぼくは学校から帰るとき、当たり前、

「また明日ね。」

と言います。でもなくなった子どもたちは、もう、「また明日ね。」と言えません。そう考えると心が苦しくなりました。

記念館には、なくなった人たちの写真がたくさんありました。子どもやお年よりも多くぼくと同じ小学生もたくさんいました。その写真を見ていると、

「命を大切にしてくね。」

「戦争のない、平和な世界にしてね。」

と言われているようでした。

ぼくは、平和について考えました。今は、戦争体験者は少なくなり、戦争の話をちよくせつ聞く機会もへっています。もし戦争を知らない人ばかりになったら、また戦争がおきてしまうかもしれません。だからぼくは、沖縄戦のことを忘れないでいたいと思います。対馬丸や戦争でなくなった人たちが、本当なら生きるはずだった「明日」。その人たちの分までぼくは、自分の明日を大切に生きていきたいです。